つながろう
CO·OPアクション情報
2012年2月29日
特別版

生協の震災被災地支援活動報告

2011年3月11日に発生した東日本大震災。被災地生協および全国の生協は、この1年間、被災地支援・復興のために数多くの活動を行なってきました。日本生協連が発行した月刊誌『CO・OP navi』および日本生協連HP掲載の『つながろうCO・OPアクション情報』から掲載記事を抜粋し、この間の生協の活動を振り返ります。被災地が完全に復興するには、まだまだ長い時間がかかります。今後も全国の生協は一致団結し、被災地への支援活動を継続して行なってまいります。

目　次

CO·OP navi
組合員・地域のために店を開け続ける　みやぎ生協……2
組合員ボランティア「おにぎり隊」　いわて生協……2
組合員に「安心」を届けるため共同購入を一斉再開　いわて生協……3
「届かない被災地」に物資を! 必要なものを必要な人へ　コープふくしま……3
CO·OP共済の訪問活動……3
東北3県以外の生協の被災状況と被災地支援……4
とちぎコープ　いばらきコープ　ちばコープ　コープながの
生協の震災直後の被災地支援……4

つながろうCO·OPアクション情報
引っ越し支援へ全国から生協職員が集結　全国の生協……5
埼玉県・旧騎西高校での避難所応援隊　さいたまコープ……5
店舗と宅配で被災産地を支援　ユーコープ事業連合……5
放射性物質除染ボランティア　コープふくしま……6
南光台店改修オープン　みやぎ生協……6
「復興支援・地産地消フェスタ」を開催　いわて生協……6
発災から半年、店舗職員全員で黙とう　みやぎ生協……7
除染カー始動　コープふくしま……7
宮城県女川町で炊き出し支援　パルシステムグループ……7
愛知から岩手へタオルがつないだ復興支援の旅　コープあいち……8
宮城・福島で、憩いの場作り　コープネットグループ……8
宮城県・志津川へ、みんなでついたお餅を贈ろう!　京都生協……8
全国の組合員理事、福島に集結　全国の生協……9
大分で「ふくしまっ子応援プロジェクト」開催　コープおおいた……9
神戸と宮城つなぐ鎮魂と再生への祈り　コープこうべ……9

CO·OP navi
震災一年を迎えて
被災地を支えた生協の底力～被災地3県・組合員理事座談会……10

上記掲載記事以外にも、多くの生協で組合員・役職員が被災地支援活動に取り組んでいます。今回はその1部の紹介になります。

震災直後の生協の支援活動

2011年3月11日、東日本大震災発生。被災地の生協も大きな被害を受けました。しかし、震災直後から、被災地のそれぞれの生協は対策本部を立ち上げ、地域住民の命とくらしを支える活動にいち早く取り組みました。そして、その活動を全国の生協の組合員・役職員が支援しました。震災直後の活動の様子を掲載します。

（以下『CO·OPnavi』5月号～7月号の掲載記事より抜粋。一部新規追加原稿あり）

3月18日午前10時、前日の雪にもかかわらず、みやぎ生協国見ケ丘店では店を取り巻くように長い行列ができました。

組合員・地域のために店を開け続ける

みやぎ生協

購入点数の制限を設けて、多くの組合員に商品が行き渡るように配慮されました。

みやぎ生協・国見ケ丘店（仙台市青葉区）では、幸いにして建物被害はありませんでしたが、店内は落下した商品で足の踏み場もない状態となり、レジも使用不能になりました。震災翌日から3日間は店外にテントを張り、できる限りの商品供給を行ないました。その後、2日間は閉店し、売場の点検・復旧に努め、3月17日から店内での部分営業を再開。18日の朝、店の前には1,000人近い人が、店の周りを半周するほどの行列をつくっていました。

店内の営業はサッカー台手前の通路部分のみ、入店は一度に4人まで、ほとんどの商品は100円、200円均一でした。また、多くの人に商品が供給できるように、「1人10点までのご利用」という制限も設けられました。

「朝6時半時点で300人ほどの方にお並びいただき、中には高齢の方も多くいらっしゃいましたので、私の判断で、開店時間を10時から9時に繰り上げました。午後3時過ぎに行列はほぼ解消されました」と副店長の伊藤和洋さん。この日、みやぎ生協では全48店舗中30店舗で営業を行ない、地域の人々のくらしを支えました。

組合員ボランティア「おにぎり隊」

いわて生協

今回の震災では、組合員も支援活動に取り組みました。そのひとつが、いわて生協のこ～ぷ委員と組合員による「おにぎり隊」です。この取り組みは、3月16～18日までの3日間実施。18日には、いわて生協・本部（滝沢村）に約20人が集まり、中には小学生の姿もありました。いわて生協職員の山崎宏美さんは「被災地で食べ物に困っている人がいる。何かできないかという組合員さんの声から始まったものです」とこの活動の経緯を教えてくれました。ここで作られた3,000個のおにぎりは、岩手県内の避難所へ宅配の配送車で届けられました。

20人が役割分担をしながらおにぎりを握りました。

組合員に「安心」を届けるため 共同購入を一斉再開

いわて生協

共同購入の再開を告げる商品案内のチラシが、被災から17日目となる3月28日から配布されました。4月6日の週に注文書を回収し、4月11日から配達が再開しました。沿岸部では多くの職員が被災して家を失ないましたが、配達担当者たちは、仕事が再会し、組合員に会えることを喜びました。

津波に加えて火災が発生した山田町では、「焼け野原を走る配送車を見てうれしかった」と多くの組合員が話してくれました。

注文書の回収が始まった4月6日、津波に加えて火災で町の8割が壊滅した山田町を訪れました。焼けた町では、がれきの撤去が始まっていましたが、もうもうと灰やホコリが舞い、マスクなしではいられない状況でした。組合員のもとを訪れた共同購入宮古支部・班担当の大川貴史さんは、組合員から注文書の回収をするとともに、お見舞い品を手渡し、組合員の安否確認も行ないました。「生協が来るのを待っていた」「顔が見られてよかった。来てくれてありがとう」など、行く先々で感謝と喜びの声をかけられました。

組合員の横田さんは、共同購入の再開をとても喜んでくれました。

「届かない被災地」に物資を！ 必要なものを必要な人へ

コープふくしま

被害の大きかった沿岸部に、食料品や生活用品などの物資を届けました。

3月末、東京電力福島第一原子力発電所から30km圏内が自主避難区域に設定されると、その地域には物資を運ぶトラックなどがほとんど入らなくなりました。また、避難所や施設によって、届けられる物資はまちまちで、必要なものが必要な人の手に届いていない状況もありました。

そんな中、沿岸部の相馬市に事務所を置く、コープふくしま・相双（そうそう）支部で、支援物資輸送が行なわれました。原発から30km圏内に近い場所にある相馬市のグループホーム（福祉施設）へ向かうまでの道は、多くの人が自主避難したため、車も走らず、人の姿もありませんでした。グループホームで暮らす方々は認知症患者が多く、避難所での生活は困難です。ここには支援物資は届かず、近くのお店は閉まり、ガソリン入手も難しいため遠くへの買い出しもできない、まさに孤立した状態にありました。相双支部長の佐藤哲夫さんが支援物資を届けた帰り際、施設のスタッフに呼び止められました。「あの、握手してもらってもいいですか」。それは、とても力強い握手でした。

相馬市の福祉施設で、感謝の握手を求められた相双支部長の佐藤哲夫さん（左）。

CO・OP共済の訪問活動

震災後間もなく、CO・OP共済に加入している組合員宅を一軒一軒うかがってお見舞い金の申請手続きを行なう、CO・OP共済の訪問活動が始まりました。4月28日に訪問活動をしたみやぎ生協の佐々木竹子さんは、「全国の生協職員が泊まり込みで駆けつけてくれ、生協の助け合いの精神を感じました」と語ってくれました。また、組合員からも「金額ではなく、お見舞いをしてくれること自体がうれしいです」「被災して初めて、人の助けのありがたさを実感しました」など、感謝の声が寄せられました。

おかやまコープの支援者は、訪問活動の際、組合員・職員の1300通のメッセージを添えたナデシコの花の種を届けました。

東北3県以外の生協の被災状況と被災地支援

とちぎコープ

栃木県は、建物損壊などの被害を受けました。とちぎコープでは、宇都宮市の近くの高根沢センターが停電（3月13日復旧）。店舗では宇都宮市にある越戸店と金井台店、矢板市にある矢板店が停電と建物被害のため一時閉店（店の前での販売は実施）。なお、金井台店と矢板店は3月13日に、越戸店は3月15日に再開しました。宇都宮本部は、停電で壬生センターに一時移転し、3月13日に復旧しました。

再開した越戸店前に、行列をつくる組合員。

いばらきコープ

茨城県は北部を中心に建物損壊や津波の被害を受けました。いばらきコープでは、水戸店とひたちなか店が建物被害と停電・断水により地震直後に閉店。ひたちなか店は3月21日に、水戸店は4月1日に営業再開。15の宅配センターのうち9センターが停電・断水し、北部地域の宅配センターは建物にも被害が出ました。美野里本部も被害を受け、土浦センターに本部を一時移転し、3月15日復旧しました。

コープ水戸店で行なわれた店の前での販売の様子。水戸店では天井が崩落する被害があった。

ちばコープ

千葉県では、津波や液状化現象などによる被害が出ました。ちばコープでは、千葉県東部の旭市の道路が地割れを起こし、配達中の配送車が巻き込まれました。また、浦安行徳センターでは、駐車場で液状化現象が発生。店舗では、四街道店と薬円台店は、店内の被害が大きく危険と判断され、一時閉店しましたが、店の前での販売を実施しました（3月15日再開）。

地震の爪痕 県内にも

「千葉日報」3月12日に掲載された、地割れに巻き込まれた生協の配送車。

コープながの

長野県は、3月12日に発生した長野県北部地震で、栄村が震度６強を記録し、住民1,700人以上が避難。コープながのでは、災害協定を結ぶ栄村役場から災害支援要請を受け、すぐに本部および篠ノ井センターの備蓄飲料水とコープながの稲里店の食品や飲料、携帯カイロ、オムツなどをトラック1台（1.5ｔ車）に満載し、夜半に避難所に届けました。翌日14日には、調味料などを第2便で届けました。

栄村の避難所への物資搬入の様子。

生協の震災直後の被災地支援

◆被災地の生協

被災地の生協は、地震発生当日に対策本部を設置し、安否確認や被害状況の把握、被災者への店の前での商品供給に努めました。また、自治体からの緊急物資支援要請に応え、自治体や避難所に支援物資を届けました。さらに、生協の配送トラックを利用して自治体（自衛隊含む）や避難所への配送に協力。同時に生協の事業再開への着手や、宅配・共済加入者等へのお見舞い訪問活動の実施に取り組み、これらを全国の生協が支援しました。

◆全国の生協、日本生協連

全国の生協もいち早く、被災地への支援活動を開始。2011年4月28日までにトラック延べ1,190台、支援者延べ3,587人を派遣しました。食品や燃料を含む約71万点（トラック約370台分）の物資支援が行なわれました。

日本生協連は、地震発生の30分後に震災対策本部を設置。同日、当面必要と思われる物資を積んだ10トントラック4台を出発させ、翌朝仙台市内に届けました。以降、取引先や全国の生協の協力をいただき、4月6日までに食料品・飲料水、毛布・タオルなど1,170万点（10トントラック633台分）を被災地に届けました。

生協のつながる力、発揮し続けたこの1年

2011年、全国の生協は被災地の状況変化に応じ、多彩な支援活動を展開していきました。避難所での炊き出し、仮設住宅への引っ越し手伝い、被災地県外で暮らす人々への支援、福島県の放射性物質除染ボランティア、被災生産地の復興支援等々。生協の「つながる力」が発揮された1年でした。（以下『つながろうCO・OPアクション情報』創刊号～11号、『CO・OPnavi』10月号等の掲載記事より抜粋）。

引っ越し支援へ全国から生協職員が集結（2011年5月）

全国の生協

2カ月半で23生協・組織、延べ537人の生協職員が参加。

参加者は活動の中で被災地の現在を体感。

岩手県災害ボランティアセンターからの要請を受け、日本生協連と岩手県生協連では、仮設住宅への引っ越しがピークになる5月31日から2カ月半にわたって、201軒の引っ越し支援活動を行ないました。遠野市に生協の支援活動の拠点が置かれ、常時10人前後が待機。要請に応じ2人一組で被災地へ向かいました。大型家電や家具の運搬もありましたが、支援する生協職員たちは大粒の汗をかきながら奮闘しました。

幹線道路沿いのがれきは撤去され、一見、復興が進んでいるように見えますが、裏道へ回れば、がれきであふれかえった状態の地域が数多く残されています。これからも多くの支援が求められています。

埼玉県・旧騎西高校での避難所応援隊（7月）

さいたまコープ

炊き出しの様子。他に子どものための交通安全教室、「ふれあい喫茶」なども開催された。

郷土料理「冷や汁」もテーブルへ。

さいたまコープでは、埼玉県内の避難所で暮らす方のために、職員やOB、組合員で結成する「避難所応援隊」による定期的な支援活動を実施しています。7月17日には、福島県双葉町の方が1,000人余り暮らす加須市の旧騎西高校で、昼食の炊き出しを行ないました。

埼玉県内の避難所は閉鎖が始まっており、大規模な場所での連帯や、情報の共有が今後難しくなります。福島県内では仮設住宅の建設が進みますが、放射線の影響を考え、居住をためらう人は少なくありません。特に小さな子どものいる保護者の不安は大きく、家庭が離れ離れになるケースもあり、そのような家族への支援も今後の課題の一つです。

店舗と宅配で被災産地を支援

ユーコープ事業連合

店内には、「合わせようみんなの力、広げよう支援の輪」や「食べて応援しよう」等のメッセージが多く掲示されている。

ユーコープ事業連合の会員生協店舗（コープかながわ、コープしずおか、市民生協やまなし、うらがCO-OP、富士フイルム生協の全147店舗）では、毎月月末に被災地への募金とする「震災地支援キャンペーン」を行なっています。これは、岩手・宮城・福島などの被災県で生産された生鮮品や加工食品・米・非食品などと一緒に、生産者のメッセージを掲示して被災地の近況をお知らせすると同時に、商品のお買い上げ総額（税抜き）から1％相当金額を被災地への義援金として寄付するものです。組合員からは、「少しでも生産者の方の役に立てれば」「無理なく参加できるいい取り組みですね」などの声をいただいています。2012年2月までに計10回開催し、910万678円(5生協合計)を義援金として被災地へ寄付することができました。

また、店舗だけでなく、宅配でも「たべる、で、ささえる。」を掲げ、支援キャンペーンを行なっており、店舗と宅配の両事業で被災産地を買い支える支援を継続しています。

放射性物質除染ボランティア(7月)

コープふくしま

何年間にもわたり住み続ける人の健康を守るのが除染の目的。

福島県内の各行政では放射性物質の除染活動が始まり、コープふくしまは、この活動へのボランティア参加を呼び掛けています。道路の表土を2cmほどシャベルで削り、その土をビニール袋に入れて運び出すと、放射線量は10分の１程度になります。除去した土の廃棄場所は難しい問題で、市の対応だけでは限界があり、放射性物質による汚染への全体的な対応を国が主導的に行なう必要があります。コープふくしまでは、放射能学習会の開催、簡易携帯型線量計の販売やガラスバッジ（個人被ばく線量計）による測定サービスの提供など、放射能に対する正しい認識を広めることに努めてきました。

「除染は地道な作業ですが、やればやっただけの成果は出ます。福島の現在を自ら知る機会にもなりますので、多くの方がボランティアとして参加し、長期的な取り組みに協力いただけるとうれしいです」（コープふくしま・野中俊吉専務理事）

南光台店改修オープン(8月)

みやぎ生協

明るく、きれいな店内は、多くの人でにぎわっていた。

8月31日、朝10時。改修オープンとなったみやぎ生協南光台店に、メンバー（組合員）たちが次々と入店していきます。3月11日から173日がたちました。宮城県でも沿岸部などに震災の爪痕がいまだ深く残る中、被災地の生協は、一歩一歩、復興への歩みを進めています。南光台店（仙台市泉区南光台）は、みやぎ生協にとって5店目の改修オープン（7月27日榴岡店、8月6日黒松店1階、8月10日新田東店、8月20日六丁の目店）。宅配（共同購入）による離島への配達もスタートしており、8月10日には寒風沢（さぶさわ）島への配達が始まっています。

寒風沢島への商品の配達。

生協の店舗や配送車による商品の供給が、被災地の人々のくらし再建を力強く後押ししています。

「復興支援・地産地消フェスタ」を開催(9月)

いわて生協

沿岸部と内陸部の企業・団体が共に協力し合い、岩手の地域復興を目指していく。

「復興支援チャリティオークション」の司会を行なう菅原則夫店長。

震災発生から半年となる9月10・11日の2日間、いわて生協の店舗・コープAterui（奥州市）が入るショッピングセンター「カルチャーパークあてるい」で、第4回「復興支援・地産地消フェスタ」が開催されました。会場には、いわて生協と地元・奥州市の23社、沿岸部の30社など、合計60のテントが並びました。旬の野菜や魚介類、加工品が、その場で焼かれたり、弁当として提供されたりして、参加者たちを楽しませました。

特設ステージでは、地元の団体による太鼓演奏や鬼剣舞に加え、津波の被害を受けた沿岸部から、釜石虎舞（釜石市）や氷上太鼓（陸前高田市）などの参加もありました。初日の「復興支援チャリティオークション」では、いわて生協「マリンコープDORA」（沿岸部の宮古市）の菅原則夫店長が司会を務め、絶妙なトークで会場を沸かせ、沿岸部と内陸部をつなぐ役割を果たしました。2日間で約2万2,000人が訪れました。

発災から半年、店舗職員全員で黙とう(9月)

みやぎ生協

復興記念タオルを広げる千葉店長。

9月11日、みやぎ生協・榴岡(つつじがおか)店(仙台市)では、復興記念セールを開催(みやぎ生協全店で実施)。発災以来初となる「2,000円以上のお買い上げでポイント7倍」に加え、記念タオルを先着1,000名様にプレゼント。小雨の降る中、いつもより1時間早い朝9時のオープン時から、たくさんのメンバー(組合員)でにぎわいました。

レジで記念タオルを受け取るメンバー(組合員)。

榴岡店は、発災の翌日から5月の大型連休前までは店の前で販売を続け、その後、施設の復旧工事のために4カ月半休み、7月27日に改修オープンしました。

「発災から半年を迎え、職員の朝会では全員で黙とうを捧げました。大変な災害ですが、それだけに生協の果たすべき役割は大きいと実感しています。これからもメンバーさんのために頑張ります」と語る千葉壽彦店長。復旧・復興へ向けての取り組みが進んでいます。

除染カー始動(10月)

コープふくしま

除染カーは、無料で貸出を実施している。

除染カーには、さまざまな道具が積まれている。

コープふくしまでは、除染カーを準備し、10月より町内会や班、学童クラブなどの団体単位の環境除染活動へ無料貸し出しを開始しています。

除染カーは、2トントラックに、除染活動に必要な道具を一式装備したもので、高圧洗浄機、くわ、草削り、スコップ、長靴、強力枝切りバサミなどが積み込まれています。この除染カーは、「除染のために役立つ車が欲しい」というコープふくしまの声を受け、リース事業で取り引きのあるオリックス自動車株式会社の協力などにより実現したものです。

除染カーは、他団体への貸し出しのみでなく、コープふくしまが窓口となって協力をしている除染ボランティアでも活躍しており、10月16日に福島県伊達市で行なわれた除染ボランティア活動でも使用されました。

宮城県女川町で炊き出し支援(10月)

パルシステムグループ

あいにくの雨にもかかわらず、多くの人が並んだ。

パルシステムグループ(パルシステム連合会および同連合会の会員生協、関連会社)とあいコープみやぎは連携し、3月末から被災地への支援活動を継続しています。宮城県女川町では依然、避難所生活を強いられる方が多く、10月13～16日、20～23日に炊き出し支援を実施。22日は、女川第一小学校にて、炭火で焼いた230人分の国産牛肉や野菜、炊きたてごはんにクリームシチュー、焼き芋などを提供しました。

パルシステム連合会執行役員の渋澤温之さんは「あいコープみやぎは職員だけでなく、理事や組合員も常に同行してくれます。われわれだけで現地の情報を入手することは不可能ですから頼りになります」と話していました。今後も、日々変化する被災地のニーズに応えながら、生協ならではの支援を継続していく予定です。

肉は、(株)福永産業より無償提供されました。

愛知から岩手へタオルがつないだ復興支援の旅(10月)　コープあいち

海藻やゴミを拾い集めるボランティアの様子。

被災された方の話を、真剣な表情で聞く参加者たち。

津波で深刻な被害を受けた岩手の気仙地区への復興支援に取り組むコープあいちは、10月28～30日にかけて、「『あなたがつなぐ復興支援』～愛知から岩手へ、往復1,800kmの旅～」を行ない、組合員39人が参加しました。今回の旅では、碁石海岸(大船渡市)での清掃活動や仮設住宅への訪問を行ない、交流会も開催されました。

コープあいちでは、発災当初から炊き出し支援やタオルを贈る活動を実施。贈られた23万枚のタオルは、地元のボランティア団体である「椿の里・大船渡ガイドの会」の方が、避難所や仮設住宅を訪ねて近況や要望を聞きながらお渡ししたことで交流が深まりました。「ガイドの会」事務局長の佐々木典子さんは「被災された方、コープあいちさん、そして、ボランティア団体のつながりをさらに強めて今後の支援に生かしたい」と話していました。

宮城・福島で、憩いの場作り(11月)　コープネットグループ

コープネット職員が、仮設住宅の方のお話をじっくり聴いている様子。

「ふれあいひろば」では、工作や外遊びなどを行なう「あそびのひろば」を実施。

コープネット事業連合は、みやぎ生協と協力し、11月21日に宮城県東松島市の仮設住宅で4回目となる「ふれあい喫茶」を開催し、仮設住宅の計75人の方が楽しみました。前日被災地を視察していた、ちばコープおたがいさま高津介護センターの君塚法子さんは「津波の被害の大きかった大曲浜を見て人間の無力さを感じましたが、仮設住宅で強く生きる皆さんの姿に人間の強さを再び感じました」と話していました。今後も月2回のペースで開催予定です。

また11月26日に、さいたまコープとコープふくしまは、福島県南相馬市の仮設住宅で「ふれあいひろば」を共催しました。現地のボランティアセンターから協力を打診され、10月から開催し、3回目となる今回は、仮設住宅の大人18人、子ども8人が参加。同日、南相馬市で「泥出し」などに協力していた職員ボランティアも途中加わり、交流の輪が広がりました。

宮城県・志津川へ、みんなでついたお餅を贈ろう!(11月)　京都生協

登米市の仮設住宅では約650人が訪れた。

京都生協本部では、約90人のボランティアが参加し、5,000個の丸餅を作った。

京都生協職員ボランティアは、宮城県漁協志津川支所(南三陸町)への継続したボランティア活動を行なっています。11月27日には、京都生協本部(京都市)で「支援餅つき大会」を開催。この餅は、12月3日に、志津川支所と志津川の漁師の方が多く移り住む登米市の仮設住宅で行なう炊き出しで配られるものです。

餅米は京都生協の取引先である鳥取県畜産農協が、「正月に被災地で餅を食べてもらおう」と、地域の子どもたちと一緒に田植えをするなど、思いを込めて育てた300kgです。会場では、京都周辺に避難されている東北の方々を招いて、つきたての餅が振る舞われました。被災地支援の様子を撮影した映像も流され、京都で暮らしながらも故郷を身近なものとして感じ続けるための工夫も見られました。

全国の組合員理事、福島に集結(12月)

全国の生協

夕食懇親会では、各生協が寄せ書きや手作りのプレゼントなどをコープふくしまに贈呈。

被災地視察の様子。まだまだ復興とは遠い現状に、息をのむ人も。

12月5～6日、日本生協連主催の「コープふくしまと被災地訪問企画」が行なわれ、全国から26生協43人の組合員理事らが福島を訪れました。これは、福島の現状を知り、今後継続した支援を行なう上で何が必要となるかを考える交流企画です（いわて生協では8月、みやぎ生協では9月に実施しました）。

コープふくしまからは24人の組合員理事・役職員が参加し、全国からの参加者に、震災当時の状況や現状について報告しました。

2日目は、バスで福島県沿岸部被災地を視察したほか、現地の産地団体の話を聞いたり、コープふくしまの店舗などを見学したりしました。富山県生協組合員理事の榊原礼子さんは「帰ったら、今回の訪問から得たことをみんなに話し、私たちも息の長い取り組みができるよう努力していきたい」と話していました。

大分で「ふくしまっ子応援プロジェクト」開催(12月)

コープおおいた

子どもたちにスケジュールを説明。3日目は、遊園地で思いっきり遊んだ。

“ふくしまっ子”が大集合し、記念撮影。

12月25日から3泊4日の日程で福島県南相馬市の小学5年生30人を大分県に招く「ふくしまっ子応援プロジェクト」が開催されました。このプロジェクトは、大分県ボランティア・市民活動センターを中心とした県内9団体の協力により、屋外で遊べない福島の子どもたちに楽しい時間を過ごしてもらうことを目的として行なわれました。

きっかけは、8月の「コープおおいた・コープふくしま復興支援交流会」でした。大分県内で被災地支援の輪を広げようと、組合員・取引先・支援団体などから幅広く参加を募ったこの交流会に同センター事務局長の高橋賢一さんが参加し、福島の実情を知ったことが今回のプロジェクトにつながりました。

コープおおいたの青木博範専務は、「自分たちだけでは限界があるが、より大きな支援のきっかけは作れる。その思いが形になり始めました」と手応えを口にしていました。

神戸と宮城つなぐ鎮魂と再生への祈り(2012年1月)

コープこうべ

東遊園地「1・17希望の灯り」（神戸市・中央区）前にて。さまざまな思いをかみしめた。

阪神・淡路大震災から17年目を迎えた2012年1月17日、コープこうべは震災にまつわる記念碑などを巡る「震災モニュメントウォーク」に、被災地支援を通じて交流してきたみやぎ生協の組合員と役職員10人を招待しました。コープこうべの組合員と役職員を含めた計53人が参加、共に歩き、鎮魂と再生への祈りを捧げました。

三宮駅前を午前9時過ぎに出発し、慰霊と復興のモニュメント「1・17希望の灯り」がある東遊園地、防災機能を備えた公園、生協運動の父・賀川豊彦ゆかりの地などを巡る1時間45分ほどのウォークでした。ガイド役のコープこうべの林律子さんは「震災から10カ月、不安は尽きないと思います。でも、もっと先、たとえば17年先の未来のことなら、考えることが希望の一つになるかもしれない」と言いました。震災の傷痕を忘れず前に進んできた神戸の姿は、宮城の方々の心に何かを残したことでしょう。

被災地を支えた生協の底力

『CO・OP navi』の2012年3月号では、被災地3県の組合員理事にお集まりいただき、座談会を開催しました。その記事のダイジェスト版を掲載いたします。

「何かしたい」気持ちから組合員活動が始まった

齋藤（司会）　2011年3月11日の東日本大震災から1年になります。震災直後、地震と津波により情報が途絶え、ライフラインも断絶しました。そんな状況の中、「何かをしたい」という気持ちから、組合員たちが集まり、各地でさまざまな活動が行なわれました。皆さんのところでは、どんなことに重点を置いて取り組んでこられましたか。

飯塚　食料のストックが少なくなる中、「在宅避難者に食料をお届けしなければ」という使命感に駆られ、移動販売で仮設住宅を回りました。「震災後初めてお金を使った。普通の生活みたいでいいね」とおっしゃる方。津波で奥さまを亡くされ、「何を買っていいか分からない」と言う年配の男性。仮設住宅で引きこもり、「生協さんが来るから出てきたよ」というおばあちゃんもいました。

みやぎ生協理事長
齋藤昭子（あきこ）さん

全国の生協の仲間が駆け付け、支部の泥のかき出しをしてくれました。しかし、「またここでやっていけるのだろうか……」という不安もありました。それほどに、地域は破壊し尽くされて、絶望的な状況でした。

少しずつ生活が復旧し、今は、仮設住宅での「ふれあいサロン」や、在宅避難の方からの要請に応じた物資のお届けなどが主な組合員活動になっています。支部の周りをきれいにしてもらえたから、こうして活動ができていると、今あらためて感謝の気持ちでいっぱいです。

高橋　震災当日、店舗の様子を見ました。停電でレジも使えない中、自家発電で明かりを確保し、100円や200円など切りのいい価格で、職員が組合員に懸命に商品を供給していた姿が印象的でした。

組合員活動としては、避難所で必要なものを聞き、それを集めてお渡しする活動から始めました。その後、全国からたくさんの支援物資をいただいたり、近所から集めたりしながら、チャリティーバザーを数度にわたって開催しました。

被害の大きかった、みやぎ生協・六丁の目店（仙台市若林区）では、4月末から店の前での販売が始まりました。店舗再開の期待を込め、みんなが元気になれるイベントをと、お祭りを２回開催し、8月20日、ようやく再開店にこぎつけました。仮設住宅での「ふれあいお茶会」、被災者を招いてのチャリティーコンサートなど、さまざまな活動を継続して行なっています。

渡邊　私が担当するのは、福島県相馬市と南相馬市を中心とする相双（そうそう）支部です。南相馬市は東京電力福島第一原子力発電所から近く、緊急時避難準備区域に指定されています。津波の被害や放射能の影響から、委員も半分は避難しました。

そんな中、少しでも食品をお届けするため、3月28日に相馬市で青空市を開催しました。生鮮食品の入手が困難でしたが、本部になんとか調達してもらい、冷凍食品の野菜も使いながら豚汁を振る舞うことができました。その後、放射能学習会や生産者支援に取り組み、仮設住宅での茶話会は、現在も継続して取り組んでいます。そして、福島に住み続けられるように、放射性物質の除染作業を積極的に推し進めようとしています。

全国の生協からの被災地支援に感謝

齋藤　今回の大規模災害では、日本生協連がコーディネートし、全国の生協から多くの被災地支援が行なわれました。被災地では、そういった支援はどのように映りましたか。

飯塚　岩手県内ではコープさっぽろやコープあおもり、秋田県北生協をはじ

いわて生協理事
いいづかいくこ
飯塚郁子さん

め、全国の生協のさまざまなトラックが走りました。組合員の中には、「日本全国にこんなにたくさんの生協があるとは知らなかった」と驚いていた人も多くいました。

CO・OP共済のお見舞い活動でも、全国から支援に来ていただき、その対応が素晴らしいと、たくさんの感謝の声が届きました。「どうしてあんなに親切にできるのか。自分もセールスの仕事をしているが、あんなふうに仕事をしてみたい」と感動を直接伝えにきてくれる方もいました。

高橋　全国の生協から多くの支援物資が届き、避難所でも生協の商品がたくさん配られているのを実感しました。今でも、「○○生協のあの商品がおいしかった」など、全国の生協の名前を耳にすることがあります。また、コープこうべのボランティアバス先遣隊をはじめとして、多くの生協職員が、宮城県に駆け付けてくれました。生協のつながりの素晴らしさを実感しました。

みやぎ生協理事
たかはしともこ
高橋朋子さん

渡邊　私のいる地域は、放射線や津波の影響から避難した人が多く、組合員世帯数は約六分の一以下まで激減してしまいましたが、全国の生協の皆さんから仲間づくり活動を助けていただき、今は四分の三近くまで回復しました。

さいたまコープには毎月2回のペースで、南相馬市の仮設住宅でふれあい喫茶を開催してもらっています。また、コープおおいたには、子どもの保養プロジェクトを開催してもらい、福島の子どもが自然に触れる機会をつくってもらっています。

復興までの道のりを見守っていてほしい

齋藤　被災地に直接行ったり、募金をしたり、全国各地に避難する被災者に手を差し伸べたり、被災地支援の形はさまざまです。今後、全国の生協に、どのような支援を期待しますか。

飯塚　全国の皆さんにお伝えしたいのは、「手を離す」ことはしてもいいですが、「目を離す」ことはしないでほしいということです。「手を離す」ことは自立につながりますが、「目を離す」ことは見放すことです。全国の生協が見守っている、そしていざというとき助けてくれる。そんな温かいまなざしを感じながら復興に取り組んでいきたいです。

高橋　時間がたつにつれ、少しずつ震災が過去になっていきます。私自身も、ふとした拍子に、震災を遠い昔のように感じます。そんなときは、まだ震災の傷痕が残る荒浜の景色を眺めます。支援団体の数も少しずつ減っていき、マスコミの被災地報道も少なくなってきています。だからこそ、地域に根差した活動をする生協は、被災地を忘れず、応援の気持ちを持ち続けて、長く被災地の支援を続けていってほしいと思います。

コープふくしま理事
わたなべようこ
渡邊洋子さん

渡邊　福島県は、地震と津波の被害に加えて、放射能の問題を抱えています。お願いしたいのは、学習会を開催するなどをして、正しく理解していただくことです。現在、放射性物質は、福島以外の場所にも飛散し、福島県だけの問題ではなくなっています。多くの人に正しい知識を持ってもらい、報道に翻弄されないでほしいと思います。それが結果として、福島を救うことにつながります。

齋藤　被災地へ支援に来られた方の感想文を拝見し、支援活動は、支援する側もされる側も、ともに人間として高め合えるものだと感じました。また、皆さんのお話を伺って、「人は一人では、人として豊かに生きられない。だからつながりが必要である」ということをあらためて思いました。

震災復興には10年以上かかるといわれています。今後も全国の生協に、継続した被災地への支援活動をお願いできればと思います。そして万が一、次の災害が起きたときに備え、全国の生協の「つながりの力」を、より生かせる仕組みづくりが必要だと切に思いました。本日は、ありがとうございました。

「つながろうCO・OPアクション情報　特別版」

2012年2月29日
発行：日本生活協同組合連合会（会員支援本部）
〒150-8913
東京都渋谷区渋谷3－29－8　コーププラザ
Tel：03－5778－8183（出版部）

※『つながろうCO・OPアクション情報』は創刊号から全てPDF形式で日本生協連のホームページ（http://shinsai.jccu.coop/）にてご覧いただけます。
※『CO・OP navi』は全国の生協関係者を対象にした月刊誌（1冊定価350円）です。ご購読等のお問い合わせは上記までお願いいたします。

つながろう CO·OPアクション情報 特別版

震災直後、全国の生協はいち早く被災地への支援活動を開始。2011年４月28日までに、トラック延べ1,190台・支援者延べ3,587人が被 災地へ結集しました。食品や燃料を含む約71万点の物資支援が行なわれ、かけつけた宅配車両による避難所等への物資の配送や生協店舗での商品供給 の支援活動などに取り組みました。その活動の一部を写真で紹介します。